

カラホト文書に見えるモンゴル王族とその活動

(要 旨)

赤坂恒明 (内蒙古大学・専職研究員)

内モンゴル自治区エチナ旗のカラホト（ハラホト）遺跡から出土した元朝期文書には、モンゴル王族・后妃・駙馬（モンゴル王女の配偶）の名前・称号が記されたもの（漢文、モンゴル文、その他）が存在する。それらの王族たちの出自については、チムール朝期に編纂されたペルシア語によるモンゴル系図『ムイッズル＝アンサーブ』（*mu'izz al-'ansāb*）、および、シャイバーニー朝初期に編纂されたチャガタイ＝トルコ語年代記『勝利の書なる選ばれたる諸史』（*tawārīx-i guzīda-'i nusrat nāma*）に収められている系譜情報から、彼らの中には、元朝に帰属したチャガタイ（チンギス・ハンの二男）の子孫、特に、末子バイダルの子孫（チュベイー門）に比定できるものが含まれていることが確認される。彼ら、バイダル裔のチャガタイ家王族たちの系譜と活動を分析すると、次の諸点を指摘することができる。

- ・元朝に帰属したチュベイ（バイダルの子アルグの子）とその兄弟、カバンとトク＝テムルは、元朝側の最前線として、チャガタイ汗国勢力と対峙したが、カラホト出土文書からもその事実を確認することができる。
- ・元朝期における肅王の位は、チュベイの兄カバンの子ゴンチェク以下、ゴンチェクの甥コペク（ケベク）、コペクの子ブダ＝メリク、と、カバンの子孫によって少なくとも三世代にわたり継承された。
- ・寧肅王の位は、チュベイの長男トクタ、トクタの弟アク＝ブカ、トクタの孫イリンチンカブと、チュベイの子孫が保持していた。なお、「トガチの乱」（1316年末～1317年）は、アルタイ西方において蜂起し、嶺北行省、さらにオングト趙王を攻掠したトガチ丞相チンサンの大軍事活動と、甘肅行省亦集乃エチナ路を本拠地とした寧肅王家出身の王族トカチ（チュベイの孫）が甘肅で起した地方的規模の叛乱、の二つから成る、と推測される。
- ・チュベイの弟トク＝テムルの子孫は、チャガタイ一族の末子（オッチギン）の家系としてアルタイ南西麓におけるチャガタイ初封時の遊牧地を継承していたが、1314年、元朝軍がチャガタイ汗エセン＝ブカを破った際、元朝側の最前線である新占領地ウイグリスタンに進駐し、次いで、アルタイに到ったホシラ（のちの大元皇帝明宗）を迎え、彼とチャガタイ汗エセン＝ブカとの仲介を行い、ホシラのチャガタイ汗国領域内への移住の道を開き、ホシラの有力な支持基盤となったと考えられ、トク＝テムルの孫イリンチンバル（リンチェンバル）は柳城王亦憐真八に比定される。
- ・ホシラの西行における、トク＝テムル裔を含むチュベイー門の動向は、元朝とチャガタイ汗国との勢力版図に大きな影響を与えた。また、「天暦の内乱」においても、彼らは、無視することができない重要な役割を演じていたと考えられる。

また、本報告では、チュベイー門以外のモンゴル王族についても注目したい。